



R. Browning

『ピバが通る』(Pippa Passes)は一八四一年から四六年に亘つて公になつた八部の詩集『鈴と柘榴』(Bells and Pomegranates)の第一部をなす優れた作品で、「朝」「晝」「夕」「夜」の四段から成立する千七百二十二行の劇詩である。ブラウニングは『ソーデロ』(Sordello)を創作するために一八三八年の春、態々イタリアへ出掛けたが、この劇詩は、その折の副産物で、執筆されたのは翌年の春から夏にかけてのこみこみ思はれる。ブラウニングは或日、ロンドンの南郊ダリッヂの森を獨り逍遙してゐた。「もし人生をかういふ風

## ピバの歌

曾根保

に唯一人過ぎ行く者があつた。微賤の身故自分の足跡をこの世に残すまいふこころは覺えないにしても、此の一步毎に、無意識の中に、而も永久的な影響を周圍の人々に投げかけるこころが考へられないであらうか。かうした幻影が詩人の胸中を往來し、遂に具體化して可憐な少女ピバ(即ちフェリッパ)になつたのである。この少女を主人公とする『ピバが通る』は作者の最も好んだ一篇の由であるが、上演に適しないにしても文學作品として非凡のものであるから、美しい日本語の正確な翻譯が出現する日の近からんこ

さを筆者は願つて已まない。今はたゞ極く荒筋を紹介して置くにせよ。

ピバは北イタリー、アソロの町——ヴェニス of 西北三十

今日一日を楽しく過ぎさういふのである。向ふの丘の中腹に華美をつくした家が見える。絹織工場主ルカの邸宅である。主婦オチマは良人の有る身でありながら、ドイツの

哩——に住む少女で、早くから両親に別れ、絹織工場に傭はれて、一年三百六十五日少しも暇の無い體であつた。今日は元日で、一年一度の公休日である。夜の明けるのを待ちかねて、飛び起き、身支度をしながら、この吉日を最も有益に利用しようと思へる。

即ちアソロの町で一番幸福な四人を算へ上げ、それぐ朝晝、夕、夜の四回に分け、自らその人々になつたつもりで、

來るこゝになつてゐる。しかし若夫婦の關係必ずしも安心の出來るものではない。生命のあらん限り變るこゝのない



音樂家シバルドミ道ならぬ關係を結んで快樂に耽つてゐる。ピバは氣高い愛の無いところを去つて、高尚な愛を求めようとする。フイーネはフランスの彫刻家ジュールミ婚約の間柄であつたが、晝にはオルカナの谷に面する新宅へ

親子の愛の頼母しさには及ばない。憂國の志士ルイギは夕方母親に會ひに忍んで来る。戀人の關係よりも穩健で、又朋友の間よりも情愛が濃かい。自分は母の顔も記憶せず、父親も知らない。出来ることならルイギの身になりたい。けれども、更に好ましいのは神の愛である。町の教會堂に隣接するお邸に今宵信徳高い監督ビシヨフが來られるまいへば、せめて一夜なりと神聖な祭司の身になつてもみたい。

一、「朝」——かう思ひ續けて、ビバは先づ朝早くオチマの家の方にやつて來た。不義の關係は遂に年老いたルカを殺害するまでになつた。それは昨夜のこゝである。屍を前にして、さすがシバルドも良心の苛責に耐えず、氣も弱くなつて、恩人を手にかけて罪の恐ろしさ、後悔の色が見える。けれどもオチマが或は勵まし、或は賺して、不義の快樂を貪つた昔の夢を思ひ出させて頻りに氣を引き立てたので、シバルドも心を取り直し、互に變るな變らじと言ひ交はしてゐる時、外をビバが通る。無邪氣に聲も清らかに、かう歌ふのである——

時は春

日は朝あした

朝は七時、

片丘に露の珠

雲雀飛び

蝸牛茨が枝に、

神、天にゐます——

世はなべて事もなし。

これを聞いたシバルドは竦然として飛び上つた。「神天にゐます」の一句は雷の如く響いた。良心が目覺めたのである。オチマの醜惡さに顔をそむけ、オチマを憎み、呪ひ、間もなく自殺する。姦婦オチマも今やすべての罪を己が身に背負ひ、シバルドの爲に祈を捧げ、「神様、わたしでなく、彼を御憐み下さい」と言つて、戀人の後を逐うて自害した。即ち、少くもビバの歌は二人の靈を救つたのである。

二、「畫」——少女ビバはこの家の出來事を知る由もなく、歩を轉じ、オルカナの谷を越えてジュールの家へ行く。

ジュールは、ヴェニスから來てゐる大勢の美術學生に瞞されてフィーネと結婚するやうになつたのである。こいふの

は、學生達はフイーネの戀文を擬造して、文學に秀でた世にも稀な才媛である如くフイーネを仕立て、遂に結婚するまでに奸計を廻らしたのであつた。ところが、式場から歸つて來る之間もなく、

事實が曝露した。花嫁

フイーネは無教育な賤しい身分の者で、趣味なごもお話にならない程度であつた。ジュールは腹立たしさの餘り

花嫁に若干の手切金を與へ、すべてを解消するに宣言した。丁度その時、外をビバが通つて行く。昔、或る宮中に仕へる小姓が、女王を

戀ひ慕ひ、眞心を表はし、その愛を促すに足る理由を作り出さうと苦心するけれども、何一つ不足の無い御身分故に

*Song from "Pippa passes" -*

*The year's at the Spring,  
The Day's at the Dawn;  
Morning's at seven;  
The hill-side's dew-pledged:  
The bee's on the wing,  
The mail's on the thorn:  
God's in his Heaven -  
All's right with the world.*

*Robert Browning.*

*Paris, October 17. '58.*

うにもならず、悶え苦しんだといふ話を骨子とした歌を歌つた。ジュールは之を聞いて自分の心に新しい光を感じる。こゝに自分が助けなくては生きて行けない女性がゐるのだ。今自分が愛の手を

差しのべ、優しく勞つてさへやれば生きて行けるのだから、すべてを諦めよう。ジュールはかう考へてフイーネを許す。ピバの歌は又しても夫婦の和解に役立つこゝが出来たのである。

三、「夕方」——愛國者  
ミ自ら標榜するルイギミ  
いふ青年が、アソロの町  
を見下す丘の中腹にある

樓上の一室で母親と語り合つてゐる。オーストリアの皇帝を暗殺する陰謀に加擔し、そのためウイennaへ出立する時機

が今宵に迫つてゐることを打ち明けるに、母親は大いに驚き、百方言を盡して暴擧を思ひ止まらせようとする。ルイギはその爲志氣が挫けて、少くも出立を明朝まで延ばさうと思案する。其時、ピバが古の明君を賞揚した歌を歌つて家の前を通る。之を聞いたルイギは「あれは神の聲だ」と言つて、愛國の熱情抑へ難く、急にそこを飛び出して何處までもなく去つて行く。従つてその夜逮捕に向ふ筈になつてゐた刑事の一隊の裏をかいて、旨々逃げて了つたのである。思ひがけぬ救ひの手は、ピバの歌によつて來たのであつた。

四、「夜」——日が暮れて、ピバは愈々最大の理想の人物に近づかうとしてゐる。即ち、監督ビシヨッフの泊つてゐる邸の近くに來る。内では監督が人拂ひをして執事ミ何事かを密議中である。この監督、實はピバの叔父なのである。執事は、ピバの父親の死にも何か關係があるらしく、死後に遺産を横領してゐるばかりでなく、ピバをも無きものにして後顧の憂ひを断たうとさへ監督に提議した。その方法として、一英國人を語らひ、甘言を以てピバを墮落させ、ローマに

誘ひ出して賣り飛ばし、悪い病に罹らせて三年のうちに生命を奪はうといふ世にも怖ろしい悪計をたくらんだ。監督の面には同意の色が見えようとしてゐる。丁度その時、夜の寂莫を破つて、ピバの歌が聞えて來る。「突如、神様は私を召された」といふ結びの一句に監督の良心は目覺めた。早速召使を呼んで、悪黨を逮捕させた。ピバは何事も知らずして家路につき、自分の部屋に歸つて行く。ピバは心の中で、オチマ、ジュールの花嫁、ルイギの優しい母親、或は監督ミ、次々にそれらの人物になりすましてゐるが、夜が迫つて來るに共に、果して自分はこれらの人物にぞれだけ近づくことが出來ただらうかミ考へ始めた。そして眠に就きながら、かう口ずさむのである——

すべての奉仕は神様の眼には皆同じだ——

最も善いものも悪いものも、我々はすべて神様の操られる人形に過ぎない。

後の者も無く、前の者も無いのだ。

劇詩『ピバが通る』は以上で幕ミなつてゐる。餘りに簡単な紹介で、眞意が通じないかもしれないが、こゝでは以上

に止めて、所謂『ビバの歌』に立ち歸ることにする。

詩型はアナピースト(anapest 抑々揚格)を基調とし、

第一の韻脚(foot)は抑音を一つ略してアイアンビツク(iambic)になつてをり、第三行と第七行とは抑音を二つながら省略して揚音一つの韻脚になつてゐる。今この詩をscanしてみるに次の如くである。

The yéar's | át the spríng  
Añd dáy's | át the mórn ;  
Mórn | ñng's át séven ;  
Thě hill- | side's dēw-péarled ;  
Thě lárk,s | òn the wíng ;  
Thě snáil's | òn the thórn :  
Gód's | in his héaven  
All's ríght | with the wórd !

押韻は spring, wíng ; mórn, thórn ; seven, héaven ;

pearled, wórd で極めて規則正しい。尙一二三句の解釋を施せば—is はよへて is の略、mórn は morning

の詩語 'dew-pearled' は adorned with dewdrops as (if) with pearls の意、'is on the wíng' は飛んでゐる、'thorn' は hawthorn (山櫨)の略である。

原詩に用ゐられてゐる言葉は割合に單純であるから、意味上困難とするところは殆んど無く、又詩型もよく整つてゐるので、朗讀してみれば分るやうに、極めて力強い音調の美が感じられるが、いざ日本語に翻譯するに當り、相當に手がかるのである。元來英語の表現が情緒的といふよりも寧ろ論理的、理智的であるため、力強く簡潔な點は一特長であるにしても、その論理的表現を情緒的表現で以て翻譯し得る方法が発見されない限り、立派な翻譯は斷念するよりほか仕方がない。所詮は兩國語の表現形式の相違である。だから、『ビバの歌』の名譯として喧傳されてゐる上田敏氏のものも、實は原詩と對照して味はつてみるに、全然別個の感じがするのである。ぐんぐん高まつてゆく原詩の上昇リズムは力強いが、譯詩には詠嘆的な弱さがあつて、原詩のもつ意味の強さ、即ち最後の「世はすべて事もなし」といふ感じが迫つて來ない。原詩の is の短縮形 's

が文勢を甚だしく引き締めてゐるのに反し、譯詩では「は」を用ゐて別な味はひを出してゐる。以上の相違は、コロンビア・レコードの「ビバの歌」（原詩）を聴いて、日曜學校で兒童の歌ふ邦譯の同じ歌を考へ合せてみれば、容易に合點の出來るこゝである。

過日、筆者は自分の受持のクラスに「ビバの歌」の邦譯を課して、三十五種類の翻譯を得た。始めの三行は大同小異、殆んゞ問題はない。即ちそこまでは、上田敏氏の譯に特に敬意を表すべき理由はなく、誰が譯しても、先づその邊のこゝろまでは可能だといふこゝになる。第四行の「片岡に露みちて」は「片岡は露の珠」にしても決して悪くはない。しかし「揚雲雀なのりいで」の一行に到つては凡手の能くするこゝろでないこゝろがわかる。次の一行、「蝸牛枝に這ひ」の「枝に這ひ」は原詩 — is on the thorn の譯で、實際は、字句の解釋のこゝろで述べたやうに、「山樅」<sup>さんびと</sup>があるべきであらうが、「蝸牛はさんびと」では、さうしてもおさまらない。又「蝸牛は茨」も苦しい。結局原意を碎いて、「枝に這ひ」を落ち著かせるこゝろになつたものと思はれる。前

に掲げた七種の翻譯の内、内村鑑三氏の「叢林に戯る」や、中川氏の「角を出し」は取るべきでない。最後の二行は上田氏の譯で、「神空にしろしめす、すべて世はこゝもなし」になつてゐるが、前半の「知ろしめす」こゝも支配の意味は稍々強過ぎるから、單に「まします」でも十分である。しかし後半の All's right は「平穩無事」の意味で、時々 All's well を間違つて引用したり、福原麟太郎氏が何處かで「すべて世はこゝもなし、こゝいふ消極的な解釋よりも、むしろ、世の中の事はすべてめでたい状態にあるこゝいふ積極的な意味に取つては如何であらう」を言はれてゐるが、そのやうに取るのは行き過ぎを言つてよからう。前回掲げた譯の内、「此世の萬事可なり」、「世は平和」、「世界はすべて是なり」、「この世の事皆正し」、「萬物はげにも正しく世を渡る」、「凡ての物は世界を調和せり」など、何れも上田氏の「すべて世はこゝもなし」に遠く及ぶこゝろでない。要するに、筆者の手許に在る四十幾種かの翻譯は、それぞれのうちに取るべき佳句も無いではないが、結局上田氏の五音節を重ねた譯が韻文として形が整つてゐるばかりでなく、す

べて原意に即しつゝ、「片岡に露みちて」ミカ、「揚雲雀なのりいで」ミカ美しい言葉を用ひ、又「蝸牛」ミいふ長い五音節の一語に對して「揚雲雀を鉤合せたミカ」、その技巧に優れたところがあつて、到底凡庸の徒のよくなるミカころではない。尙、譯詩の補遺ミして茲に支那語譯を掲げて置く。

歲在陽春，時在清晨，晨在七時，山邊滿灑着露珠；

天鷲在飛；蝸牛在荆棘；上帝在上——萬物各得其所！

#### 梁遇春譯

『ビバの歌』、特に最後の二行はブラウニングの樂天主義を説く評家が必ず引用する句であり、又同時にブラウニングに盾突かうミする人々が好んで引き合ひに出したがる歌である。こゝに代表的な攻撃的文章がある。

「この唄は平凡な朝景色を羅列し、その結論ミして極端な樂天觀を告げてゐるに過ぎない。しかもその樂天觀は人生の事實を凝視する者をして「言何ぞ容易なる」ミ歎ぜしめずにはおかないものである。加之、「The snail's on the thorn;」の thorn は horn ミの押韻上の必要

に迫られて用いた言葉かも知れないが、刺、野茨、又はさんざし、らづれの意味にして、"All's right with the world" ミいふ結論に反する事實を擧げることになる。もしこの唄が不義の戀に溺れてゐた Ottilia 及び Sebald を悔い改めさせたミいふ道德上の效果によつて批判する人があるならば、それは文學の intrinsic value ミ extrinsic value ミを混同してゐる人である——

齋藤勇博士著『英詩概論』一三一頁。

私は恩師のこの一文を讀んだ時、全く驚いたのである。尤もこの八行の詩が偉大な英詩の一つであるミ主張した人もなく、私も極く優れた詩だ、ミは言はないが、八行の中に春の景色を巧みに詠んだ良い詩だ、ミ考へてゐる。調子も、前に述べたやうに、朗らかで力強く、唄ミしても良く整つた可なり良いものだミ思つてゐる。遺憾ながら、齋藤博士の批評は、私から見るミ全く當つてゐないミ言ひたい。お互に趣味の問題だミ言へば、それ迄であるが、第一に、「平凡な朝景色を羅列し」ミ言つてゐられるに對して少々反駁を加へたい。原詩の始めの三行には、少しの文飾も無く、



簡潔に春の朝が述べてあるが、これらの言葉のもつ内容ミ音調から何物をも感じないミすれば、島崎藤村先生が「春」の一語にすら新鮮な意味を感じられた、敏感な詩人のその境地に同感ほ寄せらるべくないミで、詩を語り、歌を味はふなご、凡そ縁の遠いミのやうに思はれる。尤も散文的なやかましい批評家は、かうも言ふであらう——アソロの町に於いては、一月元旦の七時には未だ太陽は遙か地平線下にあるのだから、ブラウニングの詩は偽虚に過ぎない」ミ。一步譲つて、始めの三行に何らの感情をも覺えない人があるミしても、次の三行に至つて春の姿を心に描き得ず、*dew-pearled*の一語にさへ美しさを感じない人が果してあるであらうか。少くも、眞珠のやうな朝露を一度でも見たミのある人ならば *The hill-side's dew-pearled* の一句、又千金の値ひがある。蜘蛛の巢を銀絲で飾る朝露は全く驚異であるが、路傍の芋の葉、露の葉に宿る白金の珠を見つけてさへ、自分のその日の幸福を思ひ、心して手に掬ひたい氣持が湧くものである。或は、きら／＼輝く眞珠の玉の散るミを恐れて、手／＼も得出さぬであらう。「揚雲

雀」ミいふ言葉は立ちどころにシェリーを偲ばしめ、卑近なミではあるが、武藏野の、又故郷の青々とした麥畑を思ひ出させる。次の第六行に至つてはブラウニングの觀察眼の鋭敏さに驚歎せざるを得ない。私には次のやうな経験があつて、殊にこの一行を貴いものに思ふ。家の子供がまだ三歳の頃、朝の日の出前、祖母はきまつて三十分間位子供を連れて散歩をしてゐた。子供は必ず小さい蝸牛を二つ三つ握つて歸つて來て、庭の木の枝にしまらせる。或日私が代つて子供を連れ出した。するミ子供は「でんでんむしむし」ミいつて私に行くべき方向を教へる。行つてみるミ、枳殻の牆根に何百ミいふ蝸牛が嬉々として這つてゐるではないか。生れて始めてみる蝸牛の大群に、又その活動振りに驚きの眼をみはつた。すばらしい光景ミいふより外言ひやうもない。ミころが不思議なミに、それは日の出の數十分間に限られてゐるミで、たさへば晝か、夕方ミかに行つて見ても、恐らく一つの蝸牛さへ姿を見せない。私は數日續けて觀察してみたが、ブラウニングの『ピバの歌』を思ひ出して、*The snail's on the thorn*. の句を繰返し繰

返し口ずさんだ。右の経験から考へても、齋藤博士が「thorn  
が刺なら這ふ蝸牛が困るし、もし又さんざしなら、さんざ  
しが迷惑するのだから、All's right ミは言へない。結論  
に反する事實だ」ミ言はれるお言葉は極めて散文的な考へ  
方を示すばかりでなく、全く天然の事實に反すること、  
議論ミは成り難いのである。尙又、文學の intrinsic value  
の extrinsic value の二つまで述べられてゐられるけれども、  
この詩が劇の中に挿入された小唄であり、すべてが藝術作  
品の部分であるといふことを思へば、最後の二行も「極端  
な樂天觀」ミ極めつける迄のこゝも無いし、「人生の事實を  
凝視する者をして」言何ぞ容易たる「ミ嘆せしめずにはおか  
ないもの」なきこゝむきになるこゝも要らないやうに思はれ  
る。團十郎が片手で山門を差し上げるのを見て、兩手で擧げ  
なくては無理だミ批評した人に、兩手でも一軒の家を擧げ  
る事は出来ないのだから、片手で示す方がむしろ藝の上か  
ら眞實だミ言つた逸話がある。味はふべき言葉である。私は  
ブラウニングを徒らに辯護したのではない。この詩人には  
優れたところも多い代り、藝術家としての短所も多いこゝ

を認める。現に「Pippa Passes」の詩の標題なかに  
は少からず不満を感じる。尤も「父歸るだミか」會議は踊る」  
だミか此の種の標題もあるにはあるが「Pippa Passes」に於  
いて頭韻ミ音調を除くミ、字句に何ミなく曖昧な感じがま  
つはつてゐて、むしろ一目見たところでは「ピバ山道」とい  
ふやうに思はれはしないだらうか。しかし、「ピバの歌」を  
「平凡な朝景色の羅列」ミ言つて片づけるのは當を得ないミ  
思ふ。餘りに力強い言葉で固められるミ、何だか縹渺たるこ  
ころが無いやうに思はれ、親しみを感ぜない人もあらう。  
雰圍氣を好み、さびしさを愛するやうな人には、次のやう  
な詩は、同じ羅列でも案外受けるのではあるまいか。

池の面に四羽の鷺、あひこ。

彼方には草の堤、

春の青空、

浮ぶ白雲、

あゝ、さゝやかなるこゝみなれぎ、

年毎に想ひぞ出づる、

涙もて想ひぞ出づる。

——アリンガム——